

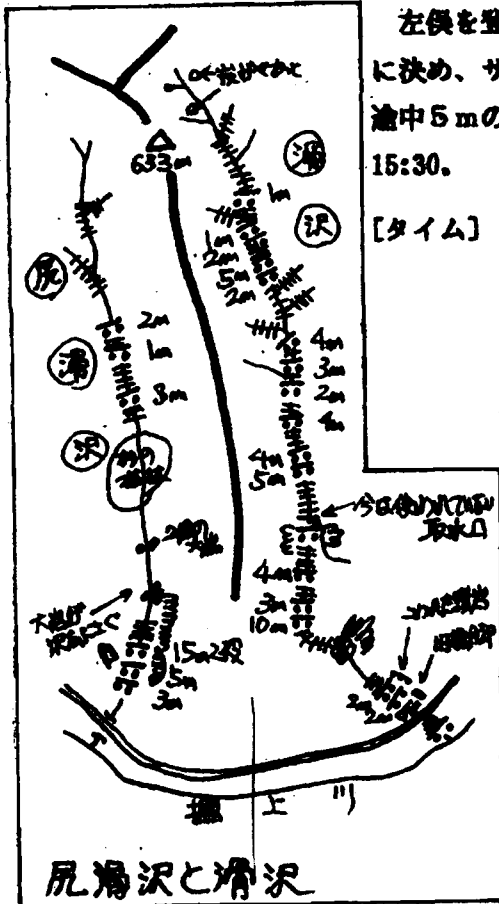
1本の道であるが、發線上でおおざっぱな地形確認をただけで下りはじめたのが失敗のもとだった。途中まで下って憂だと思いはじめ、左俣が合流した所で、ウド沢を下ってしまったのだとはっきり自覚した。

雑木林をぬけると笹原となり、その下は手入れの悪い杉の植林地となっていた。このあたりあちこちにウドがかたまって生えており、もう少し早くくれば良かったと悔やむ。

14:30水流が出てきて、いよいよ本格的な沢下りとなる。小滝が出てくるが、ブッシュを利用して簡単に下る。この沢もナメが発達している。

やがて8mの滝。右岸をクライミングダウンする。この先で岩質が変わった。花崗岩が一度バラバラになりかけた所で再び固まったという感じの岩質となる。そして小滝が続く。

15:20二俣。左俣の方が水量はぐっと多い。この時点で自分がウド沢(仮称)を下ってしまったとはっきり確認できる。



左俣を登り返し、予定通り小スリバチ沢を下ることに決め、ザックを置いて、国道399号まで偵察に出る。途中5mの滝があり、右岸を揃いて下った。国道到着 15:30。 (記)

[タイム] 下降開始(14:15)→二俣(15:20)→国道(15:30)

### 尻湯沢

1983年5月28日

10時35分下降開始。10分程下ると沢に出た。こちらの方の沢もすぐ小滝をまじえたナメが出てくるが、下降に困難な所はない。やがて沢が急に明るくなる。杉の植林地である。管理が悪いのか、大雪に痛めつけられたのか、曲がってしまったり、枝折れした杉が、ブッシュに負けまいと精一杯頭をもたげていた。

再び樹林帯の中に入る。2ヶ所で大岩が沢をふさいでいた。やがて15m 2段の滝の上に出る。持参のおにぎりを食べてから、おもむろにザイルをとり出し、懸垂下降する。登ることならできそうな滝である。その先はすぐ国道であった。

(記・一 一六)

[タイム] 633<sub>m</sub>三角点・下降開始(10:35)→下降終了・国道(12:10)

## 沢

1983年5月28日

名号橋より進行開始。小さな沢だが、名の示す通りナメがずっと続いている。まわりは樹林帯で、なかなか暗い。やがて10mの滝。斜瀑なのでフリクションをきかせて直登する。この上の3mと4mの2つの小滝を直登すると、沢はナメの中心部が深くえぐられた細いトイ状の流れとなった。こうした所には小滝や釜がつきもので、通過には見かけ以上に苦勞するものである。この沢もホールドが乏しく、体を突っかえ棒のようにしながら移動して越すなど、小滝や釜越えに結構神経を使わされた。

このトイ状の流れの部分に今は使われていない農業用水の取水口があった。岩に溝を刻んで水を流すようにしているのだが、今はこの水路もこわれてしまっている。茂庭地域の農地は比較的高い所に開けていることが多く、農業用水は隣接する沢の上流から延々と水路を引いていることが多い。ここもそうした用水施設の残骸なのだろう。

5m、4mと続く2つの斜瀑を直登すると、細いトイ状の流れも終り、平らなナメとなった。ここからはもう困難な所もない。山菜を探りながらゆっくりつめあげて、最後にはやぶをこいで10時20分、633<sub>m</sub> 3等三角点のやや北方の尾根上に出る。尾根にはかすかではあるが踏跡があった。

[タイム] 名号橋(8:15)→沢終了(10:00)→尾根(10:20)